

第一次 入学試験問題

国語

函館ラ・サール中学校

2020. 1. 8

〔問題一〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

表情がないと顔の魅力がなくなるのはなぜでしょうか。

表情の中では、笑顔が特に大切です。たくさんの人が並んでいる中で、笑顔は目に付きやすく、笑顔の顔は記憶されやすいといわれています。

それには脳の働きが関係しています。笑顔は、脳にとつて報酬として働くというのです。センジュツしたように、笑顔の顔と名前との記憶には、金銭的な報酬をもらうときに活動する、前頭葉にある眼窩前頭皮質が、記憶にかかわる海馬とともに働くのです。

笑顔が報酬となるのは、人の最大の特徴といえるものかもしれません。犬やイルカなど、動物に芸を教えこむ時のご褒美はえさとなりますが、人では違います。もちろん人間でも、ご褒美にご馳走してもらうこともありませんが、その目的はご馳走よりも、周りにほめられることではないでしょうか。先生や両親などからほめられることが最高のご褒美(報酬)で、笑顔はその「エンチヨウ」なのです。これは「A」的な報酬と呼ばれます。見知らぬ人に電車で座席を譲ってあげたり、道を教えて喜ばれること、そこで見た笑顔もご褒美となるのです。

では、笑顔の逆は、なんでしょう。怒った顔は、笑顔と同様に素早く認識されます。たくさんの方の中で怒っている顔を見つけたら、危険人物として近づかない「B」です。避けなくてはいけない危険人物を記憶することは、生き抜く上で大切なことだからです。

より現実的な問題でいえば、近所でなんとなく不審な行動を取るような人、友達関係でも貸したお金が返ってこないような人、そんな油断のならない人物は後々損をこうむらないように、頭に入れておかねばなりません。そういうことから信頼感のない顔は、記憶しやすいといわれています。ただし、記憶する脳の仕組みが、笑顔とは違っています。顔や人物のネガティブな情報の処理や、社会的・精神的に傷つく感情の処理、そして罰の処理に参与するといわれる島皮質と記憶にかかわる海馬との相互作用があるといわれています。損をしないように脳が働いているかのようです。

自分の身体の一部であるはずの顔は、単なる身体の一部という枠をこえ、①周囲の世界と自分とをつなぐ、パイプ役となっているようです。

コミュニケーションの基本となる表情は、社会の中で生きていく上では欠かせないものですが、動物も表情を読み取ることができます。表情は、社会をつくる動物にも備わっているのです。ただし動物では顔ではなく、身体全体で情動を表現します。イヌを飼っている人ならば、実感できるでしょう。吠えるイヌは、毛を逆立てて尻尾をたちあげています。身体を大きく見せて、怒りを表現しているのです。降参した方のイヌは、尻尾を丸めて足の間にはさみず。ひっくり返って、おなかを見せることもあります。自分の弱い部分を見せて、攻撃する意思がないことを示しているのです。このように表情は、イヌ同士の社会関係をつくるために利用されているのです。

イヌやネコが好きでよく一緒に遊んでいる人には、笑いのキゲンを見つけることもできるかもしれませんが。息を荒らげて舌を出すイヌの口元はほころんでいて、そこに喜びが表現されているのです。猫も遊びがこうじて興奮すると、こうした表情を見せることがあります。

動物にキゲンを持つ表情表現は、人間では顔に集中するようになりました。表情は生まれつきで、世界共通といわれています。外国に行つて言葉が通じなくても、ジェスチャーを使えば、意思の疎通ができます。それは感情表現が共通だからです。

悲しいときは涙を流して泣き、うれしいときはにっこり笑う……基本的な喜怒哀楽が表情で通じないとしたら、困りものです。

とはいえその一方で、表情にも文化差があることがわかりました。そもそも「郷に入つては郷に従え」ということわざがあるように、文化が変われば「振る舞い」も変わることは自明のことでもありません。ホームステイなどで海外の暮らしを体験してみると、ちよつとした違いを感じることもあるでしょう。特に欧米で暮らすとなると、いつもハイに演じ続けるしんどさを感じる人もいるでしょう。喜びは積極的に表現しなくてはいけない、知らない人でもすれ違つたらにっこり挨拶をする、そんな習慣に疲れてカルチャーショックで引きこもってしまう学生もいると聞きます。

欧米と日本とは、^②表情をどう表出すべきかのルールが違います。プレゼントをもらったとき、テストでよい点を取ったとき、ポジティブな感情は大きさに表現するように、欧米では求められるのです。一方の日本では、自分だけが得たことを大つぴらに表現することを控えます。周りの目を気にして、喜びを大きさに表現することを控える日本人の行動は、欧米では不審に思われてしまうことすらあります。まさしく異文化です。

マスコミの前で赤ん坊^{あかぼう}のように大泣きする議員が、話題になったことがあります。いい年をした大人が人前で恥ずかしいと、日本人でも **C** を持ちますが、人前でネガティブな表現を自制する傾向^{けいこう}が強い欧米では、さらにありえないこととして映ることでしょう。

このようなるまいの違いだけでなく、相手の表情を見るとき、顔のどこに注目するかが、文化によつて異なることもわかりました。先にも触れたように、相手の表情を読み取る時、欧米人は顔をくまなく見るのですが、^③日本人は相手の目に注目するのです。

これには、表情のつくり方の違いが影響^{えいきょう}しているようです。欧米人の表情はどちらかというとき意図的に大きく表現されますが、そうした場合、口に大きく表現されます。口角をしっかりと上にあげて大きく喜びを表現するのが、欧米人の表情のつくり方だとすると、目につこりと自然な表情をつくり出すのが、日本人です。

喜びを大きさに表現しない日本人の表情は、欧米と比べると動きが小さいのです。その小さい表情の変化を読み取るように、目に注目するのです。文化による見方の違いは、なんと一歳^{さい}未満の小さいころから始まっていることもわかっています。

文化による洗礼は、とても早い時期に成立するのですが、遺伝子のかかわりも議論されています。攻撃を抑制^{よくせい}する神経伝達物質であるセロトニンを運ぶ、セロトニン・トランスポーターの量が、日本人では特に少ない人が多く、アメリカでは逆に多い人が結構いるのです。セロトニン・トランスポーターの量が少なく不安の強いタイプは、日本人の特徴であるともいえるのです。

ピアノの発表会や試合や面接などで、大事な時にあがつてしまった苦い経験は、誰でも一度はあることでしょう。しかしそれこそが、日本人の特徴なのです。

(四) ——— 線部①「周囲の世界と自分とをつなぐ、パイプ役となっている」とありますが、「パイプ役」はどのようなものですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 周囲の人々に不愉快な思いをさせたり損をさせたりすることがないように、自身の感情を正確に周囲へ伝える信号のよ
うな働きをするもの。

イ 感情を周囲に伝えるばかりでなく、周囲の人々と良好な関係を築いたり、相手がどのような存在であるかを判断したり
するための情報源として役立つもの。

ウ ほめられたり感謝されたりする言葉だけではなかなか伝わってこない、周囲の人々の本当の気持ちに気づくきっかけと
なる役割を果たしているもの。

エ 親しい存在に対しては笑顔を作ることと良好な関係を保ち、親しくない存在に対しては警戒する表情を作ることと衝突
を避ける安全装置のような働きをするもの。

(五) ——— 線部②「表情をどう表出すべきかのルールが違う」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当な
表現を本文中から十字でぬき出して答えなさい。

(六) ——— 線部③「日本人は相手の目に注目するのです」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次の中
から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本人には対人関係に不安を感じる人が多く、相手の感情を素早く読み取って衝突を避けようとするから。
イ いい年をした大人が感情を大げさに表現するなど日本では珍しいことであり、日本人は驚いてしまうから。

ウ 日本人は幼いころから、大げさな感情表現よりも自然な形の控えめな感情表現をすることになじんでいるから。
エ うわべをとりつくろった表情とは別のところから、日本人は親しい相手の本当の感情を読み取ろうとするから。

(七)

D

 に入れるのに最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 仲良し イ 同等 ウ 公平 エ 友達

(八)

——線部④「異端^{いたん}を排斥^{はいせき}してしまう」とありますが、それはどういうことですか。その説明をした次の文の I、II にあてはまる表現を、本文中の語句を用いながらそれぞれ答えなさい。ただし I は十字以内、II は三十字以内とし、句読点も字数にふくめます。

I

人物を、

II

している存在とみなして、仲間はずれにすること。

〔問題二〕 次の各問いに答えなさい。

(一) 次の①～⑤の に適当な漢字二字を入れ、四字熟語を完成させなさい。

- ① 方正 ② 二期 ③ 名分 ④ 平身 ⑤ 本願

(二) 次のひらがなの元になった漢字をそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① 「や」：へア 矢 イ也 ウ屋 エ夜 へ
② 「ゆ」：へア 有 イ輪 ウ夕 エ由 へ
③ 「よ」：へア 余 イ世 ウ与 エ代 へ

(三) 次の①～③の省略語をそれぞれ省略しない形で答えなさい。

- ① デジカメ ② マスコミ ③ ハイテク

(四) 次の①～④の□にひらがなを一字ずつあてはめて、——線部の言葉をそれぞれ完成させなさい。

- ① や□□いところがないのなら、堂々としてい**れば**よい。
② 友だちの方が良い点数だったと知り、ね□□□□い**気持ち**をいだいた。
③ 思うように成績が上がらないのでも□□□□い。
④ 先生に指図するとは、お□□□□□□いにもほどがある。

〔問題三〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

デイズニー時計の隣の置き時計も懐かしかった。

ピンク色の長方形で、窓の中には文字盤ではなく、数字が書かれた薄い板が三つ並んでいる。

パタ。パタ時計だ。

いちばん右側の板が一分ごと、真ん中が十分ごと、左側が一時間ごとに回転して、時を告げる。ひと昔前の駅や空港の時刻表示板を、置き時計にしたような「しろものだ。妙な言い方だが、デジタル時計のアナログ版。これが出た当時は、針の時計とはひと味違う、新時代の製品に思えたものだ。ほどなく本物のデジタル時計にあつまり取って代わられたが。パタ。パタとプラスチックの板が動くから「パタ。パタ時計」。

高校生の頃には、私も自分の部屋で使っていた。父のお下がりであった。

マイホームを手に入れた代償に、父の通勤時間は片道二時間になってしまい、母より早く起きることも多かつたから、両親は別々の目覚まし時計を使っていたのだ。勤務先が変わり、不要になったとかで「何度起こしても起きやしない」と母に叱られてばかりいた私が使うことになったと記憶している。そうか、私が父の時計を譲られたのは、二度目だ。

「それも懐かしいな。パタ。パタ時計ですよね」

「ああ、フリップ時計ね。それは女房が使っていたやつです。うちには時計だけは腐るほどあるのに、ずっとそればかり使っていてね。ああ、まだ動かせば動きますよけど」

彼にとって、時計のコレクションは、家族のアルバムのようなものらしい。時計屋という職業だからこそ可能な贅沢なアルバムだ。

ふいに気づいた。

父と出かけた記憶があまりないのは、我が家のアルバムに父と一緒に写った写真が少ないからだ。少ないはずだ。父はいつもカメラを構えていたのだから。

「じゃあ、これは、お孫さんの生まれた日の記念じゃないですか」

骨董品の陳列コーナーのような品々の中では比較的新しい、アニメの美少女戦士が描かれた目覚まし時計を指さして言うてみた。うちの娘も幼い頃に欲しがったものだ。その娘も、来年の春、結婚する。

「凶星だろうと思っただが、返事がない。時計屋は手押し式のチリ吹きで時計の中の目には見えない埃を払っていた。申しわけない。お仕事中にべらべら喋ってしまった」

時計屋がようやく手を止めた。

「いえ、それも娘のです」

結婚して何年かのうちに生まれたのだとしたら、娘さんは五十過ぎのはずだ。別に大人が子ども用の時計を使っちゃいけないことはないが。

時計屋がチリ吹きの空気袋を押し、腕時計に小さな風を吹きつける。ため息をつくように。

「娘はいくつになっても子どもそのままだね。出産が長引いたせいで、脳にいく酸素が足りなくなつたようなのです。まあ、それで、ちよいとばかり、知的障害がありまして」

① 重くなつてしまつた空気を振り払うつもりで、私は愚鈍な男を装つて尋ねる。

「なんの記念日なんですか」

時計の針は、八時三十七分で止められている。成人式？ いや、成人式はないか。時計に描かれた美少女戦士は、私の娘が小学校にあがるかあがらないかの頃のアニメだから、いまから二十年ほど前の品のはずだ。

時計屋が父の腕時計を単眼鏡で見下ろしたまま、ぼとりと言葉を落とす。

「亡くなつた時の時間です」

はは。

胸から鳩が飛び出した。

「障害は脳だけじゃなかったんです。生まれた最初から、長生きはできないって言われてました」

作業机で背を丸めながら喋っていたから、私にはなく、時計の中の小さな歯車に語りかけているかのような音だった。

「生まれた時間を記憶するのなら、亡くなつた時間も、覚えておかななくちゃね」

てんでんばらばらな振り子時計の音が、急に耳に戻ってきた。

ちゅちゅちゅちゅ。

かちこちかちこち。

ていんくていんくていんく。

時計屋が小さな作業机から立ち上がり、デイズニー時計を手を取った。答える言葉を思いつけない私に、時計のうんちくを披露する口調で語りかけてきた。

「ほら、こうして、時計の針を巻き戻せば、生まれる前に時間を戻せる」

デイズニー時計の裏側のつまみを回しはじめた。午前四時が、午前三時になり、二時になり、十二時に逆回りし、九時になったところで針を止めた。

「出産が長引くとわかった時、医者に言われたんです。『念のために帝王切開にしましょうか』と」

デイズニー時計の中の白雪姫の、永遠の笑顔を眺めながら、言葉を続けた。

「腹を傷つけるなんてやめてくれ。私、そう言ったんです。なんであんなこと言ってしまったんだろう。後から思えば、なんでもないことだったのに。女房は八つ年下で、私というのも何ですが、きれいな女でした。高級時計を手にしていた気分だったんでしようね。ほら、いい時計は小さな傷ひとつで、だいなしになりますから」

ただ黙って聞いていた。時計屋も私の返事は期待していないようだった。② 彼が話しかけているのは、たぶん、私ではないだろう。

私は。パタ。パタ時計に目を向ける。奥にいますかと思っていた彼の奥さんと顔を合わせるように。表示されているのは、六時を少し過ぎた時刻だ。

作業机に戻り、歯磨きみたいなブラシで時計の裏側をこすりはじめた時計屋が、私がいることを思い出したようにぽつりと呟いた。

「女房はまだ生きています。たぶんね。フリップ時計に残してあるのは、ここを出て行った時刻です」

六時十七分。午前だろうか午後だろうか。

彼が夕方、外出から戻ったら奥さんがいなくなっていた。あるいは、朝起きたら奥さんの姿が消えていた。外へ出ていたのは奥さんのほうで、時計屋に別れを告げる電話をかけてきた時刻かもしれない。

どちらにしても、娘さんが亡くなった直後である気がした。

パタ。パタ。時計は、逆回しができなかつたはずだ。一分前に戻すためには、二十三時間五十九分ぶりを動かさなくてはならない。それでも彼はこの時計の時も巻き戻すのだろうか。

六時十七分の前に何か違う行動を取れば、別の言葉をかければ、奥さんが出て行かなかつたかもしれないと夢想して。

「さて、終わりました」

時計屋が父の時計を手にして振り向いた。

「すみませんでしたね、こっちの仕事を先にやってもらっちゃって」

私が入ってきた時に修理していたのは、懐中時計だ。

「いや、これはお客さんのものじゃないのですね」

懐中時計の針は、柱時計と同じ十二時三十分すぎで止まっていた。

「ときどき取り出して、面倒を見てやらないと、本当に動かなくなっちゃう。止めてあるのと、動かないのでは大違いですから」

さつきと立ち去りたかつたのだが、時計屋は、父の時計を人質にして、話をやめようとしなない。

「これは私の親父が持っていたものです。空襲で亡くなりました。上の姉と一緒に。店も家も焼夷弾にやられちゃって」

ちゅちゅちゅちゅ。

かちこちかちこち。

ていんくていんくていんく。

「うちの親父も時計屋でね、ああ、これはさつき話しましたっけ。私は学徒動員で軍需工場に行っていて助かつたんです。家へ帰ったら、もう何もかもが燃えてしまっていて。焼け跡のあちこちで時計がどれも勝手な時間を刻んでるんです。空襲の時間

に止まっちゃまったやつ、運良く動き続けているやつ、途中で力尽きた針、分針だけがぐるぐる回るとんでもない速さで回り続けているのもあった。その時ですよ。私が気づいたのは。時計が刻む時間はひとつじゃない。この世にはいろいろな別々の時間があるってね。おかしいですかね」

私には曖昧に返事をするこじかできなかつた。

「ああ……いえ、まあ」

請求された代金は、一万八千円。時計修理の相場は知らないが、あまりな金額に思えた。失業中の私には痛い出費だ。使うあてがあつた時計じゃない。いくらかかるか、最初に教えてくれれば良かったのに。

だが、財布にはぎりぎり支払えるだけの金が入っている。父の形見だと鼻息を荒くしていた私は、払わないわけにはいかなかった。

舐められたくない、という気持ちもあつた。私が失業中であることをこの老人が知っているはずもないのに。金を差し出した時に思い出した。

父がこの時計を買い、私の弁当がちくわと魚肉ソーセージになつたのは、ちょうど父親が転職した頃だつたことを。新しい会社では、高い給料が貰えると皮算用していたのか、それとも新しい職場で舐められたくなかつたのか。

あるいは経理ではない仕事ができると思つて浮かれたのか。

法学部で弁護士をめざしていた父は、在学中に戦争へ行つた。戦争が終わり、大学に復学したとたん、すべての法律が変わつてしまつた。平凡な会社の経理課長であり続けることに、満足していたわけではない父の心は、手の中に握りこめるほどありありとわかる。息子として。同じ男として。

だが、もう話を聞く機会はない。生きていたとしても、自分のことを話すのが嫌いな父は、答えなかつたに違いないが。「時計の針を巻き戻したいって思うことは、誰にでもあるでしょう」

私が答えるまで帰さない、という口調で時計屋が言う。今度は釣り銭を人質にされた。

誰かに話したかつたのだろう。あるいは修理を待つ人間に、きつかけさえあれば、語り聞かせている話なのかもしれない。き

つと話さずにはいられないのだ。自分の後悔を。自分には別の人生があったことを。

「あなたにだって、あるんじゃないですか」

時計屋が、自分の小さな世界に誘いこもうとするような笑顔を見せた。

③ あると言えば、まさにいまがそうだった。

二カ月前に仕事を辞めたのは、定年を二年後に控えた私に、会社が突然異動を命じたからだ。私の会社の場合、夏場の異動は、通常はありえないことだ。入社以来、ずっと営業畑だった私に、庶務課へ行けと言う。

思いあたる節はおおありだった。私は新任の年下の局長としばしば対立していた。まだ四十代の彼が、古いつきあいのクライアントを、5ないがしろにし、私には危ない取り引き相手に見える、ベンチャー企業にばかりプレゼンをしかけようとするからだ。上層部の覚えがめでたい局長は、煙たい私を目の前から消したのだから。

どうせあと二年だ。我慢することも考えた。娘の結婚式の時に、無職であるかもしれないことも躊躇する理由になった。だが、正式に異動が通達された翌日、何度も夢想したとおりに、局長のデスクに辞表を叩きつけた。妻には「意地っ張り」と言われた。意地っ張りというより、親父譲りの見栄っ張りなだけかもしれない。

あれで良かったのかどうか、この齡でのまともな再就職が絶望的な状況であることを知ってしまった、いまの私の心は揺れている。情けないことに最近では、退職届を出さず、おとなしく庶務課に勤務している自分を夢想することもある。

④ 少し考えてから、私は時計屋に答えた。

「いえ、ありません」

それでも時計の針は前へ進むためにある。父から貰った。パタパタ時計のように。

「ふうーん」

私の言葉を鼻息で吹き飛ばし、作業机に戻りかけた時計屋が振り返った。唇の片側を意地悪げにひん曲げて言う。

「ひとつ言ってもいいですかね」

「はこ」

「その時計は、偽物ですよ」

やはり、父は父だ。知っていて使っていたのか、気づかずに使っていたのか、どちらにしても、私の父親には、おしやれや高級品は似合わない。

「そつですか」

私の返事が、なにやら嬉しそつだったことに、時計屋が驚いた顔をした。それから小さな作業机に戻り、懐中時計を手に取つて、また自分の時間の中に沈みこんでいった。

(荻原浩『時のない時計』より)

(二) ─── 線部1～5の意味として最も適當なものを後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

1 「しろもの」

ア 製品 イ 偽物 ウ 景品 エ 模型

2 「うんちく」

ア 長い年月をかけて収集した品々
イ 見事に来たええあげられた高い技術
ウ 十分にたくわえられた深い知識
エ 聴く者に感動をあたえる語り

3 「だいなしに」

ア 代わりのないものに
イ 価値のないものに
ウ 大したことのないものに

エ 取るに足りないものに

4 「相場」

ア ものごとを評価するときの目安

イ 法律にもとづいて決められる価格

ウ 世間一般に定まっている値打ち

エ 一般常識として知っているべきこと

5 「ないがしろにし」

ア 手段にし

イ 無視し

ウ 大切に扱あつかい

エ 軽蔑けいべつし

(二)

——線部①「重おもくなってしまった空気を振り払はらうつもりで、私は愚鈍ぐどんな男おとこを装よそおって尋ねる」の説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の質問が「時計屋」に悲しい記憶を思い出させてしまったことに気づいた「私」は、自分が鈍感どんかんで愚かな人間であることを思い知らされた。

イ 自分の言動によって「時計屋」を傷つけてしまったことを後悔している「私」は、話題を別の新しいものに変えて空気の転換てんかんを図ろうと思った。

ウ 自分の軽薄けいはくなおしやべりのせいで「時計屋」が不機嫌ふきげんになってしまったので、「私」は滑稽こっけいなことを言っいてその場を和ませようとした。

エ 自分の誤解から会話の内容が深刻なものに変わったことであいたたまれなくなった「私」は、重苦しさを感じ取とっていない

いふりをすることにした。

(三) — 線部② 「彼が話しかけているのは、たぶん、私ではないだろう」とありますが、この時の「私」が「時計屋」について考えていたこととして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「時計屋」はかつて妻や娘に対して取り返しのない過ちを犯してしまったことを悔やんでおり、そういう自分の思いをかみしめているのだと思っている。

イ 「時計屋」が自分の浅はかな考えによつて家族を不幸にしまった過去をなぜ「私」に打ち明けているのか、その真意を推し量りかねている。

ウ 「時計屋」はかつての失敗を忘れられないつらさを聞いてもらえるだけで満足しているため、「私」に対して返事を求めることはないと考えている。

エ 「時計屋」は家庭を壊してしまったという罪の意識を抱えているが、それを告白したい本当の相手は家を出て行った妻なのだと思っている。

(四) — 線部③ 「あると言えば、まさにいまがそうだった」の説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 定年前に退職することになったいきさつを思い出した「私」は、可能なら過去に戻って上司との関係を修復し、会社に勤めたままで、娘の結婚式を挙げてやりたいと思っている。

イ 父の時計を修理している「時計屋」と話しているうちに、「私」は自分の子供時代を思い出してしまったので、時計の針を巻き戻して、別の道を歩み直したいという思いに駆られている。

ウ 相談しないで会社を辞めたことを批判されたのが原因となつて妻との間に精神的な距離ができたことを思い悩んでいる。「私」は、なんとしても時間を戻したいと思っている。

エ 納得のいかない異動を理由に会社を辞職したのだが、失業したままの「私」は、今になって自分の行動は短絡的だったかもしれないと後悔し、二カ月前に戻りたいとも思っている。

(五) — 線部④ 「少し考えてから、く『ふうーん』から読み取れる「私」と「時計屋」の人生に対する向きあい方をそれぞれ二十字以内で答えなさい。ただし、句読点も字数にふくめます。